

岩崎純一歌集		『新純星余情和歌集』>1999年の部				
歌集名読み		しんじゅんせいよせいわかしふ				
作者		岩崎純一				
通釈・語釈		園井長光、岩崎純一(自釈)				
作者サイト		http://iwasakijunichi.net/				
和歌ページトップ		http://iwasakijunichi.net/waka/				
詠進年月日	題	1999年の歌会・歌合(全て自歌会・自歌合)	通釈	語釈	他歌人欄	
主催: 岩崎純一	歌数:4首 歌人数:1名 自歌数:4首	『花歌』(はなうた)			評	派生歌など
1999	桜を詠んだ歌。 自撰					
1999/4/17	蕾む花	冬を経て枝も心もつぼむかな桜の春を待ちし果たてに	冬を経て、枝ばかりか心にも蕾ができたようだ。この桜を待ってきた果ての今に。			
1999/4/20	咲く花	咲くのちを知るか知らぬか我ぞ知る花は知らじの夢も空言(そらごと)	咲いたあとには散ってゆく事実を、桜自身は知っているのかいないのか。そんなことは私は知っている。「桜自身は知らないだろう」という夢心地の人間の考えが虚妄であることも。			
1999/4/23	散る花	ひとときは月も隠るる姿かな春風の上(うへ)ににほふ花びら	散るその一瞬は、背景の月も隠れてしまふほど空一面に広がる姿だ。春風の上に乗って輝く桜の花びらは。			
1999/4/25	亡き花	散り果てて今や昔の影もなし夕暮嘆く葉桜の空	散り果てて、今や昔の姿もない。夕暮も嘆き悲しむような葉桜の広がる空は。			
主催: 岩崎純一	歌数:2首 歌人数:1名 自歌数:2首	『人生哀歌』(じんせいあいか)			評	派生歌など
1999	哀歌を詠んで書き留めていたもの。 自撰					

1999/9/18	哀歌	天の原ふりさけ見ても降りしき る月出ぬ夜の我が胸の雨	天空を仰ぎ見ても、月の出ぬこの夜に、 我が悲しき胸中から流す涙のような雨が 降りしきるばかりである。	◇音「ふり×降り」 ◇本歌取「天の原ふりさけ見 れば春日なる三笠の山にいでし 月かも」(阿倍仲麻呂『古今』)		
1999/10/20	哀歌	明日今日(あしたけふ)昨日(きの ふ)に向かふ我が心西日の 前の朝の桜に	明日から今日へ、今日から昨日へと、我 が心は昔に向かってゆく。今のような西 日ではなく、朝日に照らされていた頃の 桜に。			